

パリから見えるこの世界

Un regard de Paris sur ce monde

第44回 外国語との付き合い、あるいはなぜ外国語を学ぶのか？

「翻訳するとは、理解することである」

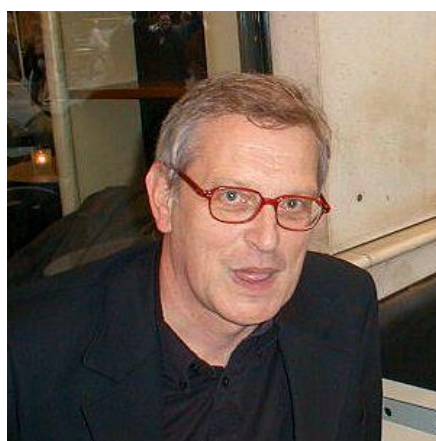
——ジョージ・スタイナー

わたしとフランス語との付き合いは、50代半ばに突然始まった。そのため、いまに至るまで言葉が体に馴染むことがなく、異物のままの状態でわたしの中にある。そこが若い時から慣れ親しんだ英語との大きな違いになる。大学院生活を振り返れば、そういう言語を媒介として哲学をやるというプロジェクトであったことが見えてくる。今回は、フランス語や英語との付き合いの中で感じ取った外国語を学ぶ意味について考えてみたい。

フランス語を始めた当初から、フランス語を日本語に移し替える過程で、日本語だけを読んでいた時とは明らかに異なる変化が生まれていることに気付いていた。それまで何気なく見ていたものに新しい光が当てられるような、無意識に済ましていたものが新鮮なものとして蘇るような感覚がそこにあったからである。異なる言語を読む場合、すでに理解していると思っているものでも日本語に置き換えなければならない。その行為により、対象をいろいろな角度から眺めることになり、これまで知ったつもりになっていたものが少し違って見えるようになる。つまり、見えていなかったものが見えてくるのである。

フランスに渡る前、ブックマークして時々訪問していたブログがある。ル・モンドの「赤縁眼鏡による美術愛好家」(Amateur d'art « par Lunettes Rouges ») という美術ブログである (<http://lunettesrouges.blog.lemonde.fr/>)。2005年夏、わたしはパリのパスツール研究所にひと月ほど滞在した。その時、何気なくこのブログを訪問して驚いたのだ。そこには、その年の3月に始めたブログがル・モンドに載ったことや訪問者が増えていることを喜んでいられる様子が語られた後、日本にも Paul Ailleurs という読者がいると書かれてあった。その名前こそ、当時わたしが書いていた日本語ブログのハンドルネームだったからである。ここで「赤縁眼鏡」氏にコンタクトしなければ偶然を愛する者の名が廃るとでも考えたのか、早速メールを送った。すると、その数分

後に次のような返事が届いた。「あなたのブログには以前から気付いていましたが、ちんぷんかんぷん。日本にいるフランス人が日本語で書いているのか、フランス好き (*francophile*) の日本人が書いているのか分かりませんでした。いまテロに襲われたばかりのロンドンにいますが、もしお時間が許すのであればパリでお会いしたい」。その数日後、ポンピドゥー・センター近くのカフェでのランデブーとなった。その中で、「赤縁眼鏡」こと、マルク・ルノー (Marc Lenot) 氏はパリの大学を卒業された後ボストンの大学に学び、ワシントン DC での勤務を経て、ロンドンで仕事をしながら美術館巡りを欠かさないほぼ同年代の美術愛好家であることを知った。少し似たような経歴をお持ちなので親近感を持ったが、その後パリで美術のマスターを終え、現在はドクターの学生をされていることを知り、いまでは同志のような気分になっている。



「赤縁眼鏡」のマルク・ルノー (Marc Lenot) 氏
カフェ・ポーブール (Café Beaubourg) にて
(2005年7月8日)

さて、その年が明けた一月の末、再びブログ「美術愛好家」を訪問した。そこで体が震える経験をするようになった。その記事には、彼の元に届いた新年の挨拶の中で心に響いたものとして、チリの詩人パブロ・ネルーダ (Pablo Neruda, 1904-1973) の詩を紹介したスライドショーが挙げられていた。すぐに観てみると、素晴らしい雪景色を背景に現れるフランス語に訳された詩は、わたしの心をも打った。その感動を日本語に移し替えたいと思い、訳し始めた。その時である。これまで体験したことのない、心が奮い立つようなエネルギーの迸りが内から込み上げてきた。それだけではなかった。その日本語を頭の中で声に出すと、そこにある言葉が意味を持って立ち上がってくるような感覚を覚えたのである。誰かによって日本語にされた詩を読んだ時にも同じような感動を味わうことができたであろうか。フランス語を自ら日本語にした

ものを読むということが、これほど大きな変化を及ぼすことに心底驚いたのである。どうしてそうなるのか未だに分からないが、その後も幾度となく同じ体験をし、現在でもそれは変わらない。これらの過程で、外国語と触れ合うことが新しい知識や日本語に豊かさを齎してくれるだけではなく、生きる力をも与えてくれるように感じ、そこに外国語を学ぶもう一つの意味が隠されているのではないかと考えるようになった。

2005 年秋、言葉に慣れるために新たにフランス語のブログを始めた。そして翌年の春、長い間哲学を教えていたというフランスの方からコメントが届いた。拙ブログを最初からじっくり読んだと断った上で、次のような分析がしてあった。

「あなたのブログを特徴付けているのは、活力 (*la dynamique*) です。あなたはこの世に生きている人たちの仲間で、そこに参加することを知っています。あなたのフランス語への思い入れの強さには驚いています。言語は人間が住む家です。もし薦めるとすれば、ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の『ヒューマニズムについて』 (筑摩書房、1997) (*Brief über den humanismus, 1947; Lettre sur l'humanisme, 1970*) などはよいでしょう。あなたはイメージに惹き付けられています。それから、時の流れに身を委ねることが気に入っています。すでに亡くなっている人と同時代人であろうとする意思をそこに感じます。あなたの天性の活力は現象学と結び付いていて、フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) やハイデッガーを愛するために生れてきたのです。そして、それはカンディンスキー (Wassily Kandinsky, 1866-1944) へと繋がるでしょう」

まず、突然のご宣託を受け、びっくりした。さらに、これを読んでいる時、書かれてあるすべての言葉が立ち上がり、その意味がわたしの中に滲み込むように入ってきたことに驚いたのである。フランス語をやっていないならば、このような幸運に浴することはなかったのではないか。その時、外国語の恐るべき力を体験していると感じていた。ついでだが、このご宣託はその後もどこかで気になっているが、10年後のいまも確かめる余裕を持たないままである。

ところで、わたしのもう一つの外国語は英語である。28歳から35歳までの7年に及ぶアメリカ生活の中で、残念ながらいまではその感覚はなくなっているが、一時は体の一部になったと感じた言語である。当時は言葉の習得に忙しく、模倣と反復と単線的な記憶に相当の時間を費やしていたはずである。そのため、考えるという精神運動

(252 巻 2 号) が殆ど行われていなかった。その状態が日本に帰ってからも続き、英語が許す範囲での思考しか行われていなかったことに気付き愕然としたのは、フランスに渡る数年前のことであった。ただ、記憶を詳しく辿ると、英語が外国語のすべてであった時には、その文化から多くの靈感を得ていたことが見えてくる。



エドワード・ボイス博士

この写真はジュディス・バード(Judith Bard)氏から恵与された

わたしが文章の書き方を学んだと意識したのは、もう 35 年ほど前になるニューヨーク時代のこと。恩師のエドワード・ボイス (Edward Boyse, 1923-2007) 博士からであった。博士との直接のお付き合いは、論文を書く時間に限られていた。博士の横に座り、わたしが書いたドラフトについて議論しながら進むという、文字通り「共に書く」作業の中でのことであった。年に 1 回程度、週 2~3 日、1 日約 1 時間で 2~3 カ月に及んだこの過程で、文章の一つの書き方に接したような気がした。「考える」ということと同様に、それまで文章の書き方を教えられたという記憶はなかった。あるいは、教えられてはいたのだろうが、はっきりとは意識されていなかったのかもしれない。そのため、流れるような文章は流れるように書かれていると勝手に思い込んでいたのである。ところが、論文が出来上がるその現場に居合わせ、母国語であっても呻吟しながら文章を書いている姿に目を見開かされたのである。勿論、すらすらと書く人もいるのだろう。しかし、博士の作業は言いたいことが最も明確になるように時間をかけて言葉を選び、言葉のブロックをあちこちに動かしながら作り上げるというものだった。それはまさしく「書くことは考えることだ」という言葉の意味を体得する時間であり、職人が一つの作品を完成させる時の手作業を思わせるものでもあった。わたし

にとって貴重な啓示となったのである。

このような経験から、フランスでは模倣、反復、単線的な記憶による所謂「フランス語の習得」を行わず、頭の中を自由な状態に保ちながら、読みを中心とした思索にエネルギーを注ぐようにした。今回の滞在は考えるためのものと決めていたからである。そのため、未だに怪しげなフランス語しか話せない日本人なのだが、この方針を貫いたことに間違いはなかったと思っている。お蔭で思考に使うことのできる空間が大幅に広がっただけではなく、日本では倦怠感を覚えながら読むようになっていた英語が再び新鮮な言語として蘇ってきた。異なる外国語の間で起こったこの相互作用も想像を超えるものであった。読む領域が変わったこともあるのかもしれないが、いまではフランス語と共に英語も仕事のためだけでなく文化の言葉として捉えることができるようになってきている。さらに、フランス語を介することにより、これまで馴染みのなかった分野にも抵抗なく入っていくことができるようになってきている。これも嬉しい変化である。最近では、靈感を得るのはフランス語からで、それを日本語なり英語で展開するというやり方になっている。そもそも哲学に入るところからフランス語の影響を受けていたことを考えると、これはあまりよく理解できていない言語ゆえの効果なのかもしれない。

2009年春、ポーランドのクラクフに滞在した際、アウシュビッツを訪問した。その時、そこに集まってくる人たちの風貌の多様さ、それにも増して言葉の混雑ぶりに驚き、「一体、ヨーロッパ大陸には何が詰まっているのか？」と期待を込めて思った記憶がある。確かに、バベルの塔の逸話は現代世界のいろいろな問題の根を照らし出しているように見える。しかし、この世界の真の姿を理解しようとする時、一言語の世界観だけでその全体が見えてくるだろうか。異なる言語が切り取った世界を併せ観ることが欠かせないのではないだろうか。あの逸話はこの世界を混乱させるための謀ではなく、寧ろ世界をより深く多面的に理解させることにより「もの・こと」の本質に導くための計らいだっただと見ることはできないだろうか。実は、外国語学習の重い意味がそこにあり、実用面だけに目が行きがちなか、この点こそ強調されなければならないと考えるようになってきた。そして、理解するためにはいくつもの視点を入れ、現実を組み立て直すことが不可欠であるという意味で、今回のエピグラフの逆、すなわち「理解するとは、翻訳することである」にもまた真があるように見える。

ここで、冒頭で触れたパブロ・ネルーダの詩を10年ぶりに読み直してみたい。いま

でもその時と同じように心が奮い立つであろうか。

その人はゆっくりと死に向かう

旅をしない人

本を読まない人

音楽を聴かない人

その目で発見することを知らない人

その人はゆっくりと死に向かう

自尊心を自ら破壊する人

決して他人の手を煩わせない人

その人はゆっくりと死に向かう

日常の奴隷になり

毎日同じ道を歩く人

決して道標を変えない人

決して服の色を変えようとしない人

そして、決して見知らぬ人に声を掛けない人

その人はゆっくりと死に向かう

瞳に再び光を与え

傷ついた心を癒す

愛情や感情の渦を避ける人

その人はゆっくりと死に向かう

仕事でも愛情生活でも不幸にある時

進む道を変えない人

夢を実現するために

危険を冒さない人

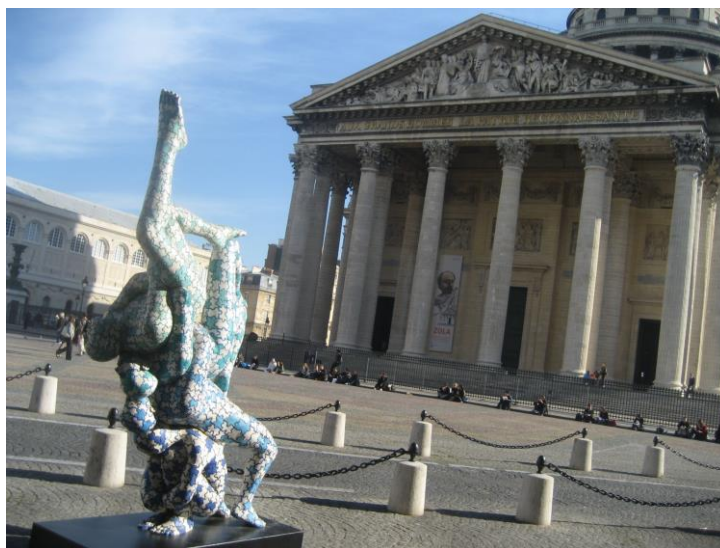
人生で一度たりとも

尤もらしい助言に逆らうことのなかった人

いまを生きよ！

今日に賭けよ！
いますぐ動き出せ！
ゆっくりと死に向かうな！
自らの幸福を奪うな！

ひょっとすると、この詩は意識下でわたしのパリ生活を支えていたのかもしれない。
そんな想いが湧いてきた久しぶりの日本である。



秋のパンテオン辺り
(2008年10月23日)

(2016年4月3日)